酒井　げん　―女性の美しさを求めて―

現在、世界各地でファッションショーがくり広げられています。観客が注目するのは、はなやかな衣装ばかりではありません。服のデザインに合わせたヘアスタイルにも熱い視線が注がれます。「ヘアスタイリスト」は、おしゃれな子たちのあこがれの職業となっています。

酒井げん

げんは、慶応三（一八六七）年、仙台に生まれました。世の中が明治という新しい時代になり、人々の生活も大きく変わろうとしていました。それまでなかなか認められることのなかった「職業婦人」に対する人々の考えも変わる中で、げんは髪結い師として活躍しました。

げんは、ヘアスタイリストの先がけだったのです。

げんは、幼いころからきれいなものが大好きでした。中でも強くひかれたのが、美しく結い上げられた日本髪でした。きれいに髪を結った女の人が通るたび、げんの目は黒髪にくぎづけになり、姿が見えなくなるまでじっと見つめていました。

げんは、大きくなったら髪結いになって、たくさんの人の髪をきれいに結ってあげたいという思いをもつようになりました。しかし、それを口に出すことは決してありませんでした。当時は、女の人が仕事をもつことを、簡単に許してもらえる時代ではなかったのです。

十五歳になったある日、げんは思い切って両親に髪結いになりたいという思いを打ち明けました。

両親は驚きました。両親は、げんが結婚して家の中の仕事をすることを望んでいたからです。当然、げんの願いは聞き入れてはもらえませんでした。どうしても、幼いころからの夢をあきらめきれない

職業婦人…女性が社会に出て働くことが少ない時代に、職業を持って社会の中で働く女性。

げんは、何度も何度も両親にたのみました。

とうとう、父はその熱意に負け、げんが髪結い師の元へ修業に出ることを許しました。こうしてげんは、髪結い名人と言われていた横山みをの所に弟子入りすることになったのです。

髪結いの修業は、厳しいものでした。当時は、弟子は師匠の家に住みこみ、師匠の家族といっしょに暮らしながら修業を積むのがふつうで、髪結いの修業をしながら、師匠の家の家事も行いました。そうじに洗たく、三度の食事の準備、ときには、師匠の子どもたちの面倒も見なければなりません。そのようにして、お手伝いさんのような生活の中で、髪結いの勉強をするのです。

それでもげんは、少しもつらいとは思いませんでした。もともと手先が器用で、覚えの早いげんは、家事も修業も前向きな気持ちではげみ、めきめき腕を上げていきました。

十七歳になったとき、師匠から一本立ちを認められ独立したげんは、仙台で開業しました。

そのころ、めざましく西洋化が進む中、明治十八（一八八五）年、東京で医師と雑誌社員によって「婦人束髪会」がつくられ、女性をこれまでの日本髪から解放しようという動きが起こりました。不便できゅうくつな上に重い、衛生的でなくお金もかかるといった日本髪を、もっと手がかからない簡単な髪型にしようというのです。これは、女性が社会に出て仕事をしやすくするような新しい考えでした。この考えに共感したげんは、「婦人束髪促進会」をつくって、簡単で便利な髪型を研究して、多くの髪結い仲間に広めていきました。髪を後ろで一つにまとめたり、三つ編みにしてたばねてかんざしなどで留めたりするような自分で結える髪型を紹介していきました。

その後、げんは石巻に店を開くことに決めました。当時はまだ鉄道がなく、船による物の運搬が中心の時代で、海運の便がいい石巻には、東京や横浜の船がひんぱんに出入りし、都会の名士やその夫人、多くの名妓などが訪れており、そのころの石巻は流行の先がけ地だったのです。げんの思った通り、店は髪結いの客が後をたたず、大はんじょうしました。そればかりか、都会で流行している新しい髪型や

修業…学問や技術を学び身につけること。

一本立ち…一人の力でできること。

名妓…有名な芸者。長唄やおどり、三味線などを行い、酒席を楽しいものにする人。

洋装に合わせた髪型などの新しい情報もどんどん入ってきました。もともと研究熱心なげんは、それらを次々に取り入れて髪結いとしての腕をいっそうみがきました。

二十五歳まで石巻にいたげんは、再び仙台にもどる決心をしました。そのころの仙台は、県の中心地として大きな発展をとげていました。

（生まれ育った仙台の地で、思うぞんぶん髪結いの仕事をしよう）

そんな思いを胸に、げんは、東一番丁に新しい店をかまえました。

仙台で開業したげんは、江戸時代から続く日本髪の伝統を守りつつも自分の工夫を入れた新しい日本髪を結うことにも力を入れるようになりました。げんの髪結いの技術が評判になり、お得意様には地元仙台の上流家庭の奥様方が多くなりました。当時、上流家庭では、夫が朝食の席に着く前に、妻はきちんと日本髪を結い上げておく習慣があったのです。そのため、げんの店には、朝早くからお得意様が詰めかけました。げんは、お客さん一人一人の年齢や職業、個性に合わせて日本髪を結い上げました。三十種類以上の髪型があったといわれています。

げんは、お客さんの日本髪を結い上げるたびに、近くの写真屋に行って写真をとることにしました。できあがった写真の光線の加減や髪型の写りが悪いと何度もとり直しをするほど、美しい髪の写真にこだわりました。その五十人の髪型に氏名を書きそえ、『髪のしおり春笑草』という冊子にまとめました。

げんはできあがった『髪のしおり春笑草』を開き、写真を一つ一つ見つめ、うなずくのでした。

この冊子は、店のお客さんの髪型の見本や弟子の教科書のように使われたといいます。

大正二（一九一三）年、日本で最初に美容専門学校として東京女子美髪学校ができました。この学校は女性の髪結いの技術を後の世の人に伝えることを目的につくられました。げんは、髪結いの技術が認められ、名誉講師

『髪のしおり春笑草』（酒井家蔵）

上流家庭…お金持ちで、社会的な地位もある家庭。

に選ばれたのです。

「世の中では、一に衣装、二に髪型というけれど、いかに衣装が立派でも髪型が悪かったら見られたものではない。髪型がよいとどんな衣装を着ても見栄えがするもので、何より髪型が一番である。」という考えをもって、げんは、若い生徒を前に自分の技術を伝えようと熱心に教えました。

げんは、昭和十九年、七十七歳でこの世を去りました。

「髪結い」から「美容師」、そして「ヘアスタイリスト」へと、時代とともに、その呼び名は変わりましたが、現在も多くの人がげんの夢を受けつぎ、女性を美しくする仕事を発展させています。

『髪のしおり春笑草』（酒井家蔵）

酒井げん

酒井げんは、慶応三（一八六七）年、仙台に生まれた。明治、大正、昭和にわたって髪結いとして石巻や仙台で活躍した。げんは、江戸時代から続く日本独特の髪結いの伝統を残すため、自分の手がけたさまざまな日本髪を写真にとり、写真帖『髪のしおり春笑草』を作った。

名誉講師…その人のそれまでの仕事を認められた特別な先生。